

総長海外出張報告

アジアと学び世界に挑む人材の育成

～シンガポール国立大学との学術交流協定を締結～

8月16日(木)から18日(土)にシンガポールに出張しました。昨年につき、今年も大村愛知県知事と御一緒しました。今回の出張の主な目的は、シンガポール国立大学との協定に署名し、両大学の学生交流並びに共同研究を強化することでした。

皆さんにシンガポール出張についてお伝えします。

○各行事について

1. チー貿易産業省上級国務大臣との面会

チー貿易産業省上級国務大臣と面会しました。チー大臣は、今年45歳の若手の政治家ですが、将来有望と目されている方です。

チー大臣とは、科学技術による社会貢献として、基礎科学から社会実装への移行について、名大がアジアに重点を置いて研究・教育に取り組んでいること、シンガポールが東南アジアの中心的な地位にあること、名大とシンガポールとの研究協力や学生交流を今後も進めることなどについて意見交換しました。



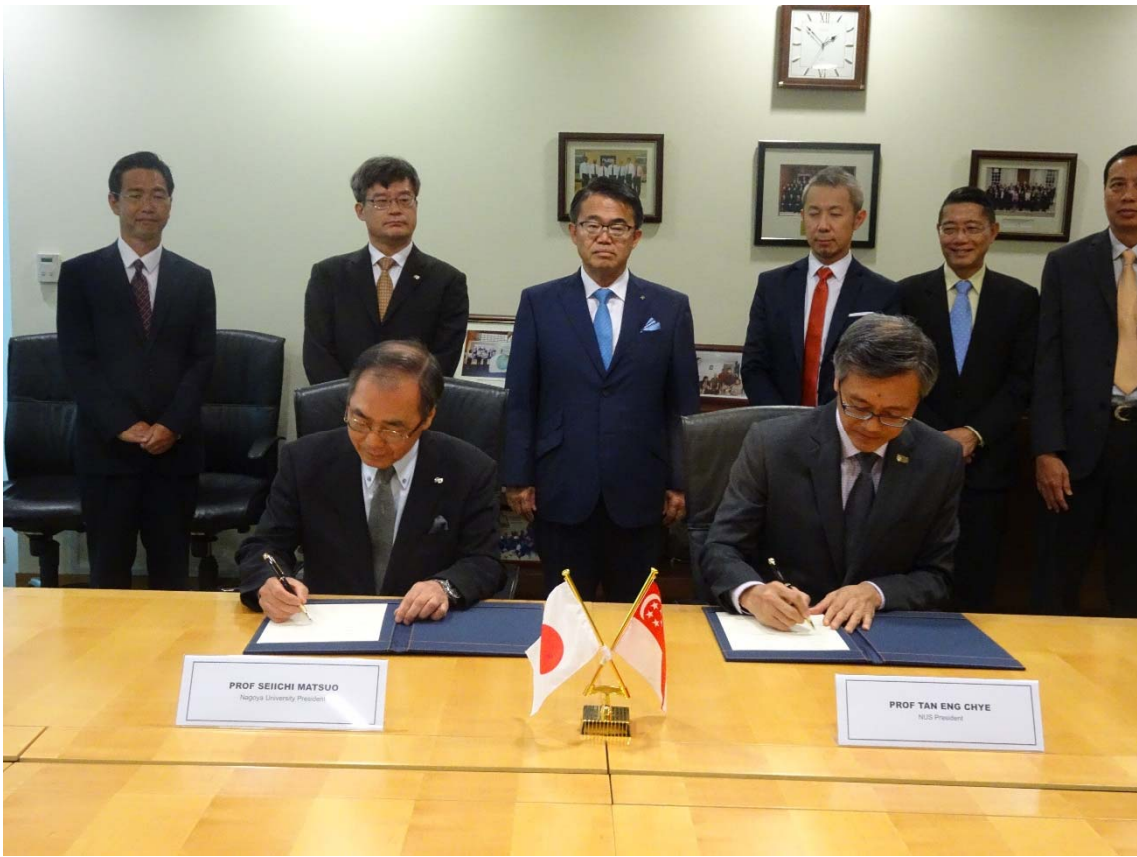
2. セレターエアロスペース・パークの視察

シンガポールの北東部にあるセレターエアロスペース・パークを訪問し、Chief ExecutiveのSia Kheng Yok氏から、セレターエアロスペース・パークの概要について説明を受けました。同パークはセレター空港を中心とした航空関係の工業団地であり、エアバス、ロールスロイス、ボンバルディア、フッカーなど主な航空関連企業が入っていました。1,800メートルの滑走路を有し、その滑走路をプライベートジェットが利用しているほか、パイロットの養成や飛行機の整備等が行われています。



3. シンガポール国立大学との協定の署名

シンガポール国立大学のタン学長との協定の署名式に、大村知事とともに臨みました。本協定の趣旨は、研究・教育の交流を推進するための全学協定と学生の交換留学を実施するための全学学生交流ですが、この協定締結がきっかけとなり、名大とシンガポール国立大学との連携協力が一層盛んになることを期待しています。



4. 記念セミナー

署名式に引き続き、協定の締結を記念するセミナーがシンガポール国立大学で開催されました。

名大からは、未来社会創造機構の森川教授や、2014年にノーベル物理学賞を受賞した未来材料・システム研究所の天野教授が講演を行い、シンガポール国立大学からは工学部の John Wang 教授がそれぞれの研究内容にかかる講演を行いました。

セミナーの開会にあたり、私から、名大は国際交流に特に力を入れていること、大学間協定による交流は中身が重要であり、今後具体的な交流内容を深めていきたいこと、シンガポール国立大学は名大のベストパートナーであると認識していることなどをあいさつで述べました。



○出張全体を通じた所感

シンガポール国立大学の学長が今年から、タン学長に交代しました。タン学長とは、6月に台北で開かれた APRU (Association of Pacific Rim Universities: UCLA が主導して、アジア太平洋に面するトップ大学が集うネットワークで、名大は今年から参加。日本からは、東大、東北大、阪大、名

大、慶大、早大が加盟)の学長会議でお会いしています。また、知事同行の出張というのは、私から知事ならびに愛知県や産業界に、「海外展開は産官学で連携して行いましょう」と提案したことが背景にあります。愛知県は、「知の拠点あいち」あいちシンクロトロン光センター、自動運転、長寿科学研究などで名大との関係も深く、今回、シンガポール国立大学と愛知県との間でも協定が締結されました。

さて、今回も「弾丸ツアー」(1泊3日)でのシンガポール出張となりました。工学系を中心に15名ほどの名大の研究者及び学生と一緒に出張し、セミナーや研究打合せを行いました。準備段階から、両大学の大学院生を中心にプログラムが組まれたとのことで、大変盛り上がったようです。従来からあった経済学分野、量子科学分野に加えて、新材料や自動運転など他のいくつかの分野でも急速に交流が深まっています。

タン学長から、シンガポール国立大学の躍進の秘訣を聞きました。タン学長は、「日本はシンガポールのお手本であり、今後も頑張ってもらいたい」とのメッセージをくださいましたが、以下のような話からシンガポール国立大学の強さの一端を垣間見ることができました。

- (1) シンガポール国立大学の収入の70%が国の運営費交付金に拠っている。
- (2) 一方で、大学の基金(endowment)は8,000億円ほどあり、この運用益は約7%の利率、すなわち560億円くらいある。
- (3) 基金は主に寄附によるものだが、集めた寄附金1に対して国から1.5の報奨金が出る。すなわち100億円集めると合計で250億円の収入となる。上記基金は、このようにして獲得したものである。
- (4) 手厚い支援をしているにもかかわらず、入学定員と授業料以外は、国から大学に対する規制はない。ただし、運営費交付金は毎年1%ずつ削減されている(これは上記の基金投資による収益で問題なくカバーされる)。シンガポール国立大学の学長は、日本に比べ、はるかに大学経営の自由度が高い。
- (5) 留学生については、総数と特定の国に偏らないよう厳格な規制がある。授業料は、シンガポール国籍の学生の授業料を1とすると、外国人留学生のうち、2年以上シンガポールで働く者は2、シンガポールで働かない者は4の割合で徴収している。
- (6) 大学の施策は相当大胆にかつスピーディーに進めている。その背景には豊富な資金と大学の自由度、高い使命感があるように思う。

以上から感じることは、国と大学との間でしっかりとした信頼関係があることです。国は全力で大学を支援し、大学はそれに応える頑張り

結果を出しています。日本の場合には、様々なステークホルダー間で一種の相互不信の連鎖にはまっているようにも感じました。私自身は現在総合科学技術・イノベーション会議の非常勤議員や国立大学協会副会長も務めており、大学と国、産業界をつなぐ立場にもありますので、ステークホルダー間の信頼の絆を、格段に太くすることが重要ではないかと強く感じました。